

## ILC の科学的意義に関する報告

素粒子原子核物理作業部会は、平成 26 年 6 月以降 8 回にわたり、国際リニアコライダー（ILC）計画の目指す研究内容と、その内容が巨額の投資に見合った科学的意義を有するかについて検証・議論し、平成 27 年 3 月に報告をまとめた（以下、「前回報告」という）。同報告を踏まえて、国際リニアコライダー（ILC）に関する有識者会議（以下、「有識者会議」という）は、平成 27 年 6 月に「これまでの議論のまとめ」を公表した。その際は、ILC は衝突エネルギー 500GeV（GeV=10 億電子ボルト<sup>1</sup>）の電子・陽電子衝突型加速器と想定して議論を行った。

その後、ILC に関する国際的な研究者組織の一つであるリニアコライダー・コラボレーション（以下、「LCC」という）でまとめられた ILC 計画の見直し案<sup>2</sup>が、リニアコライダー国際推進委員会（以下、「LCB」という）における審議<sup>3</sup>を経て、国際将来加速器委員会（以下、「ICFA」という）において承認<sup>4</sup>され、平成 29 年 11 月に公表された。この見直しにおいては、2017 年までの 13TeV LHC 実験の結果を踏まえた上で建設に必要なコストを引き下げることも考慮して、ILC 計画は衝突エネルギーを 500GeV から 250GeV とする提案（以下、「250GeV ILC」という）に変更された。この公表を受けて平成 29 年 12 月に開催された有識者会議において、250GeV ILC の科学的意義について検証し、留意すべき点について専門の見地から検討を行うため、当作業部会が再度設置された。今回の当作業部会では、特に前回報告において最新の知見を踏まえて再度検証が必要となった部分について、平成 30 年 1 月以降 5 回にわたり議論し、検証を行った。本報告は、その結果について示すものである。

## 1. 欧州合同原子核研究機関（CERN）における実験結果について

- 前回報告及び「これまでの議論のまとめ」においては、ILC の性能、得られる成果等については、欧州合同原子核研究機関（以下、「CERN」という）が設置する大型ハドロン衝突型加速器（以下、「LHC」という）におけるエネルギー増強後の 13TeV LHC によるⅡ期実験の結果に基づき見極めることが必要とされている。
- LHC の実験スケジュールについて、13TeV によるⅡ期実験は当初 2015 年から 2017 年とされてきたが、その後 2018 年まで延長されている。当作業部会において 2017 年末までの LHC における実験結果を確認したところ、ヒッグス粒子の発見以降様々な成果はあ

<sup>1</sup> 電子ボルト (eV) : エネルギーの単位。電子ひとつが1ボルトの電圧で加速されたときに得るエネルギーの量。  
<sup>2</sup> 「Physics Case for the 250 GeV Stage of the International Linear Collider」(LCC Physics Working Group / October, 2017) , 「The International Linear Collider Machine Staging Report 2017」(Linear Collider Collaboration / October, 2017)  
<sup>3</sup> 「Conclusions on the 250 GeV ILC as a Higgs Factory proposed by the Japanese HEP community」(Linear Collider Board, 8 November 2017, Rev 1)  
<sup>4</sup> 「ICFA Statement on the ILC Operating at 250 GeV as a Higgs Boson Factory」(Ottawa, November 2017)

るものの、標準理論を超える新粒子（強い相互作用をする超対称性粒子の可能性のある粒子）・新現象（暗黒物質や余剰次元）の兆候は捉えられていない。

- さらに、これまでの実験結果から、LHCにおいて、Ⅱ期実験が続く2018年末までに新粒子や新現象が観測される可能性は低いことが判明しており、前回報告において示されている以下のシナリオについては、(1)(2)は該当せず、(3) 13TeV LHCで新粒子や新現象が観測されない場合となった。その結果を踏まえて、国際研究者コミュニティは、ヒッグス粒子の精密測定的重要性から、ILCは当初計画の500GeVから衝突エネルギーを下げ、250GeVでヒッグスファクトリーとして運転を行うように見直したことから、その内容については修正を要する。(→3.)

#### 前回報告6.(1)～(3)【抜粋】

##### 6. 13TeV LHCの成果を踏まえたILC等のシナリオ

13TeV LHCでの成果を踏まえたシナリオに応じILC計画で実施する場合の今後の戦略方針は以下のとおり。

##### (1) 13TeV LHCで新粒子（強い相互作用をする超対称性粒子の可能性のある粒子）が発見された場合

方針：ILCにより、ヒッグス粒子やトップクォークの精密測定から、新粒子の背後にある物理現象を解明する。LHCにおいて、強い相互作用をする新粒子が割合軽い<sup>5</sup>場合や250GeV以下の質量をもつ新粒子に崩壊しているらしいとの示唆がある場合には、ILCにおいてこの新粒子を発見し、詳細解明を行うことが期待される。そうでない場合は、エネルギーアップグレードがゆくゆくは必要となる。

効果：超対称性の存在の証明、あるいは複合ヒッグス粒子の確認などにつながり、大きな発見や研究の進展が期待される。ILCで新粒子が発見された場合にも、大きな研究の進展が期待される。

<sup>5</sup> ILCで発見される可能性のある最も軽い新粒子の質量は、典型的な超対称性理論では強い相互作用をする超対称性粒子の概ね1/7以下とされている。ただし、理論的には不定性が大きいという意見もあることに留意が必要。

(2) 上記以外の新現象(暗黒物質や余剰次元)と思われる事象の兆候が観測(発見)された場合

方針: LHC で発見された新現象の性質を ILC で精査し、ヒッグス粒子やトップクォークの精密測定とあわせて、標準理論を超える物理を研究する。

効果: 暗黒物質の初観測や余剰次元の探索の足がかりの観測により、大きな発見と研究の進展が期待される。

(3) 13TeV LHC で新粒子や新現象が観測されない場合

方針: ヒッグス粒子やトップクォークの精密測定から標準理論を超える物理(超対称性理論、複合ヒッグス理論等)を探索する。また ILC は LHC では検出が困難なタイプの新粒子にも感度があるため、これらの新粒子の探索も行う。LHC で未発見の原因を精査し、ILC で発見できる新粒子を探索するとともに、将来のエネルギーアップグレードの必要性を検討する。

効果: 標準理論からのズレが観測された場合は、そのズレの大きさとパターンから、標準理論を超える物理の方向性と関連する新物理のエネルギースケールが明らかになる。新粒子が発見された場合にも、大きな研究の進展が期待される。

## 2. 250GeV ILC の科学的意義について

○ 国際研究者コミュニティにおいて、ILC 計画の衝突エネルギーを 500GeV から 250GeV に下げる見直しが行われた。これにより、加速器の建設コストを引き下げ、ILC 計画の目標について焦点を絞ったものにすることができる、と報告されている。

○ 前回報告においては、ILC の目指す科学的意義を以下のとおり整理していた。

(1) ヒッグス粒子やトップクォークの詳細研究によるヒッグス機構の全容解明で標準理論を超える物理を探索

(2) 超対称性粒子などの新物理の探索、及び発見された場合その詳細研究<sup>6</sup>

(3) その他(暗黒物質や余剰次元)

○ (1) について、250GeV ILC による実験が最も優位性を有するのは、ヒッグス粒子

<sup>6</sup> LHC で新たな物理が発見される場合、それが ILC のエネルギー範囲や測定精度でどの程度まで解明し得るか等の点にも留意が必要。

と素粒子の結合定数の精密測定である。ヒッグス粒子は現在知られている強い相互作用及び電弱相互作用による力を感じない新粒子とも結合し得る性質があり、暗黒物質や通常の実験では検出不可能な粒子とも相互作用すると考えられる。結合定数を高い精度で測定し、標準理論からのズレに素粒子ごとのパターンが見いだされれば、新しい物理の性質に関する情報が得られる。その結果が、今後の素粒子物理学が進む方向性に示唆を与える可能性がある。例えば、暗黒物質の正体やヒッグス粒子が真の素粒子か複合粒子であるかどうかなど、現在の標準理論では説明が困難な課題に対し、ヒッグス粒子の結合定数の精密測定が、その解明の端緒を与える可能性がある。

- また、衝突エネルギー250GeV でヒッグス粒子の生成断面積が最大化されることに加え、13TeV LHC で新粒子の兆候が観測されず 250GeV ILC でのヒッグス粒子の精密測定に有効場理論が利用できることが明らかになった<sup>7</sup>ことから、ヒッグス粒子の精密測定の実現可能性がより明確になった。
- 一方、500GeV ILC から 250GeV ILC へと衝突エネルギーを下げたことにより、前回報告において、ILC 計画における重要な課題の一つとして挙げていたヒッグス粒子の三点結合（一つのヒッグス粒子から二つのヒッグス粒子ができる反応）の測定は、250GeV ILC ではできなくなる<sup>8</sup>。また、トップクォークの精密測定についても、衝突エネルギー350GeV が必要であることから、250GeV ILC では実験が不可能となる<sup>9</sup>。
- （2）については、前述の 2017 年末までの LHC における実験結果から、強い相互作用をする超対称性粒子については 1.5TeV~2TeV 以下に存在する可能性が極めて低いと考えられる。したがって、強い相互作用をする超対称性粒子としない超対称性粒子の理論的な対応から、LHC では探索が困難なため ILC で直接測定することが期待されていた、強い相互作用をしない超対称性粒子<sup>10</sup>については、当初計画の 500GeV ILC で発見できる可能性は低く、見直し後の 250GeV ILC では更に低い。
- 一般に電子・陽電子衝突実験は LHC に代表される陽子・陽子衝突実験では検出が困

<sup>7</sup> 結合定数の精密測定に必要なヒッグス粒子の全崩壊幅の決定は、250GeV ILC では困難と考えられていたが、新粒子が直接生成されないエネルギー領域では、全崩壊幅の決定に有効場理論に基づく近似計算が十分な精度で適用できることが判明した。

<sup>8</sup> 仮に三点結合定数の標準理論からのズレが予想を超えて大きい場合は、250GeV ILC でヒッグス粒子と Z 粒子等との結合定数の精密測定により、その効果が観測される可能性がある。

<sup>9</sup> LHC の将来計画である HL-LHC におけるトップクォークの質量測定精度は標準理論における真空の安定性の検証が可能なまでに向上すると考えられるため、ILC において衝突エネルギーを 350GeV にまで上げてトップクォークの質量を精密に測定する物理的な意義は下がる。

<sup>10</sup> LHC で発見された新粒子が強い相互作用をする超対称性粒子の場合、ILC で発見される可能性がある最も軽い新粒子の質量は、典型的な超対称性理論では強い相互作用をする超対称性粒子の概ね 1/7 以下とされている。ただし、理論的には不定性が大きいという意見もあることに留意が必要。

難なタイプの新粒子にも感度があるが、新粒子が 250GeV ILC で直接生成される可能性は低いため、主にヒッグス粒子の結合定数の精密測定や輻射補正<sup>11</sup>の測定等の間接的な方法を用いて探索する。

- (3)については、ヒッグス粒子のインビジブル崩壊や一光子事象、標準理論粒子の対生成における輻射補正等を測定することで暗黒物質や余剰次元等の存在を見極める間接的な方法<sup>12</sup>をとるので、250GeV ILC においてもその意義は余り下がらない。

### 3. 13TeV LHC の結果を踏まえた 250GeV ILC のシナリオ及び留意点

- 科学的意義の観点から、13TeV LHC の結果を踏まえた 250GeV ILC のシナリオは以下のとおり。

#### 13TeV LHC の結果を踏まえた 250GeV ILC のシナリオ（科学的意義の観点）

方針：ヒッグス粒子と他の素粒子の結合定数を精密測定し、標準理論を超える物理の解明の端緒となる事象を探索する。また、主に間接的な方法による暗黒物質や余剰次元等の探索も行う。

効果：ヒッグス粒子と他の素粒子との結合定数の精密測定において、標準理論からのズレが観測された場合は、そのズレの素粒子ごとの大きさとパターンから、標準理論を超える物理の方向性とそのエネルギースケールが明らかになる。  
また、暗黒物質や余剰次元等が観測された場合も研究の大きな進展が期待される。

- 他方、13TeV LHC の結果から、ILC では新粒子の直接探索による発見の可能性は低い。更に 500GeV ILC から 250GeV ILC への見直しにより、トップクォークの精密測定は実施できないことに留意する必要がある。
- 上記シナリオの妥当性については、技術設計報告書（TDR）検証作業部会において示される 250GeV ILC のコスト見積り等も併せて検討されるべきものである。

<sup>11</sup> 量子力学の不確定性原理によると、非常に短い時間内では高いエネルギー状態になることができるため、まれにしか起こらない超高エネルギー状態を経由する崩壊を観測することにより、重い粒子の影響を低いエネルギーでも調べることができる。

<sup>12</sup> 電子・陽電子衝突では衝突のエネルギーが正確に決まっているため、暗黒物質や余剰次元に関連する粒子に関しては、生成された側と反対側に放出された粒子を計測することで欠損エネルギーと欠損運動量を算出する等の方法により、その粒子の質量を決めることができる場合がある。

# LHCの13TeV運転の成果に応じた500GeV ILCのビジョン

別添1

13TeV LHCでの実験結果を踏まえた500GeV ILCでの研究の科学的意義及び国際的な求心力の変化	13TeV LHCの実験結果による変化					備考
	ILCの科学的意義		ILCの国際的な求心力			
	上がる	変わらない	下がる	上がる	変わらない	
1. ヒッグス粒子やトップクォークの精密測定から標準理論を超える物理の探索						
LHCで新粒子の発見があった場合						LHCで発見がある場合、精密測定で如何なる物理かを特定する必要があり、標準理論からのズレが見えないリスクも下がるため、意義は変わらない、または更に高まるとの両論がある。求心力はLHCと2分。
LHCで新粒子の発見がない場合						LHCで発見がない場合、ILCしか他に手段がないとして、科学的意義は更に高まる、または変わらないとの両論がある。LHCへの求心力が低下した場合は、標準理論を超える物理へのアプローチで、ILCでの精密測定に対する求心力が高まる。
2. 超対称性粒子などの標準理論を超える新粒子の直接探索による新物理の研究						
LHCで新粒子の発見があったが、対応する新粒子がILCで直接見える可能性が低い場合						ILCで見える可能性が低い場合は、エネルギーアップグレードがゆくゆくは必要となる。エネルギーアップグレードによって新粒子が直接見える可能性が高い場合は、ILCが一定程度の求心力を有するとの意見もある。
LHCで新粒子の発見があり、対応する新粒子がILCで直接見える可能性が高い場合						新粒子の素性を解明する上で、非常に大きな科学的意義があり、国際的な求心力も高まる。
LHCで新粒子の発見がない場合						ILCで探索可能な新粒子が存在する質量領域が現在より狭まる。しかし、ILCにおける新粒子の探索については手がかりがほとんどないことから、ILCでも新粒子の発見が可能との意見があるほか、ILCがLHCとは異なるタイプの新粒子に敏感であるため、相対的に求心力がある、または高まるとの両論がある。

(1) LHCで発見された新粒子が強い相互作用をする超対称性粒子の場合、ILCで発見される可能性がある最も軽い新粒子の質量は、典型的な超対称性理論では強い相互作用をする超対称性粒子の概ね1/7以下とされている。ただし、理論的には不定性が大きいという意見もあることに留意が必要。

(2) LHCで探索可能な新粒子の質量の上限は、2 TeV (2000 GeV)。500 GeV ILCで直接探索可能な新粒子の質量の上限は250 GeV。(8TeV LHCでの実験の結果、1 TeV以下では強い相互作用をする新粒子の発見なし。)

# 500GeV ILC(当初計画)と250GeV ILC(見直し後)の科学的意義の比較

## 別添2

500GeV ILC(当初計画)で期待されていた成果 [前回報告書とりまとめ(2015年3月)時点]		LHCの13TeV運転の結果を踏まえて 250GeV ILC(見直し後)に期待される成果			備考 (科学的意義の変化の理由)
解明される物理 (ILCにおける重要度順)	実験における観測量	探索・検証の可能性 (参考) 500GeV	科学的意義の変化		
		250 GeV	上がった	変わらない	下がった
(1) ヒッグス粒子精密測定による新たな物理の探索	ヒッグス粒子結合定数の測定 ・クォーク(トップ以外) ・荷電レプトン ・ゲージボソン	可能	可能		
(2) 新粒子直接探索	超対称性粒子探索 拡張ヒッグス粒子探索	可能性低い			可能性更に低い
(3) 間接的方法による暗黒物質や余剰次元等の探索	モノジェット、一光子放出事象等のエネルギー・質量欠損事象	可能		可能	
(4) 標準理論における真空安定性の検証	トップクォーク質量精密測定	可能			不可能

・LHC実験の結果、標準理論を超える物理を探る手段として、ILCにおけるヒッグス粒子の精密測定は科学的意義は高まった。

・ヒッグス粒子の精密測定により、標準理論を超える新物理の探索が可能であり、250GeVでヒッグス粒子の生成断面積が最大になる。

・結合定数の精密測定に必要なヒッグス粒子の全崩壊幅は、新粒子が直接生成されないエネルギー領域では、有効場理論を用いて決定できることが判明した。

・ヒッグス粒子の三点結合の測定は250GeVでは不可能だが、仮に三点結合定数の標準理論からのズレが大きい場合は、ヒッグス粒子とZ粒子等との結合定数の精密測定により、その効果が観測される可能性がある。

・LHC13TeVでの探索で新粒子が発見されなかったことから、理論的に対応する新粒子がILCで発見される可能性が低くなった。

・ヒッグス粒子のインビジブル崩壊や一光子事象、標準理論粒子の対生成における輻射補正の測定等の間接的な方法で暗黒物質や余剰次元等の探索が可能である。

・トップクォークの質量をILCで精密に測定するためには、350GeV以上のエネルギーが必要であるが、LHC実験でのトップクォーク質量の最終的な測定精度は、標準理論の真空安定性の検証が可能な程度に向上すると考えられるので、ILCでのトップクォークの質量測定の物理的意義は下がる。



国際リニアコライダー (ILC) に関する有識者会議  
素粒子原子核物理作業部会報告 (前回報告)

当作業部会は、国際リニアコライダー (ILC) 計画の目指す研究内容と、その内容が巨額の投資に見合った科学的意義を有するかについて検証を行い、その意義を整理するため、平成 26 年 6 月以降、8 回に渡り議論を行った。この議論においては、主に以下の 3 つの観点を中心に議論を行った。これらの議論の結果について、主要事項を以下に示す。

- (1) 素粒子原子核物理学分野における将来の目標と ILC の位置付け
- (2) 上記のうち、既存加速器 (大型陽子加速器 (LHC) 等) で見通せる成果
- (3) 上記のうち、ILC が目指す成果及びその際の性能

なお、当作業部会では、ILC について衝突エネルギー $500\text{GeV}$  ( $\text{GeV}=10$  億電子ボルト<sup>1</sup>) の電子・陽電子衝突型加速器と想定して議論を行い、必要に応じてエネルギーアップグレードされた ILC についても議論を行った。

## 1. 科学的意義 (将来の素粒子物理学 (高エネルギー分野) の目標に対しての ILC の役割)

### ○素粒子物理学の歴史と現状

素粒子物理学は物質の内部構造とそこに働く根源的な力の法則を研究する学問である。その発展により、近年では宇宙の誕生や進化などの理解においても素粒子物理学の重要性が認識されるようになった。

○素粒子物理学は 20 世紀の後半以降加速器の進歩と共に新たな粒子や現象が発見され、それを手がかりに理論的研究と更なる実験を重ねることで大きな発展を遂げた。特に 1970 年代以降、陽子・(反)陽子衝突型加速器と電子・陽電子衝突型加速器によって多くの発見と測定がなされてきた。20 世紀中には物質を構成するクォークとレプトン及びそれらの間に働く強い力、弱い力、電磁力を媒介するゲージ粒子からなる素粒子の標準理論の枠組みの正しさはほぼ確固たるものとなり、そして 2012 年には素粒子に質量を与えるヒッグス粒子が発見されて標準理論の枠組みを構成する全ての要素が実験的に確認された。

○ヒッグス粒子は今まで知られていたクォークやレプトン、及び相互作用を媒介するゲージ粒子とは全く違う粒子であり、今後ヒッグス粒子の全容を解明していく必要がある。それと共に、宇宙の暗黒物質の存在や様々な理論的研究から、標準理論が素粒子の世界を記述する究極の理論でないことも広く認識されるようになった。従って現在の素粒子物理学の大きな流れは標準理論を超える物理がどのようなものであるかを探ることで

<sup>1</sup> 電子ボルト (eV) : エネルギーの単位。電子ひとつが 1 ボルトの電圧で加速されたときに得るエネルギーの量。  $1\text{eV}=1.6 \times 10^{-19}\text{J}$

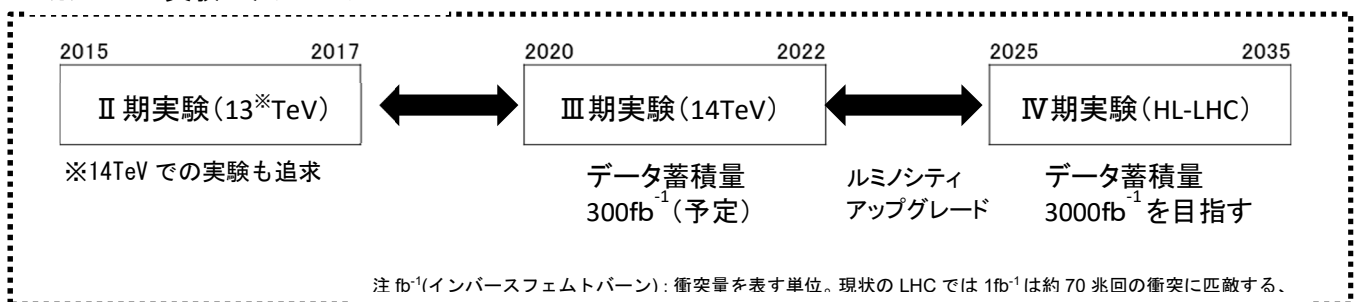


ある。

○素粒子物理学における究極の目標は、素粒子・宇宙を支配する自然法則の統一的理解である。この理解に至るまでには、力の統一や、超対称性、あるいはこれら以外の新たな物理について実験的に研究していくことが重要と考えられている。

○特に、電弱相互作用のエネルギースケール（数百 GeV）と、これより 10 桁以上高いと推定されていて、素粒子間に働く強い力、弱い力、電磁力が統一されると期待される大統一のエネルギースケール、あるいは重力が重要になるプランクスケールという非常に大きなエネルギースケールとの違いを無理なく理解するには TeV (TeV=1 兆電子ボルト) のエネルギースケールに超対称性などの新たな物理が必要であると広く認識されている。また暗黒物質もこの新たな物理と関連した粒子である可能性が広く議論されている。これらを研究するために、エネルギーフロンティア加速器 LHC により超対称性粒子などを直接観測する方法が取り組まれてきている<sup>\*</sup>。それと共に、大強度を目指した加速器である電子・陽電子衝突型加速器 (KEKB) や大強度陽子加速器施設 (J-PARC) などでの間接的な探索や非加速器実験を含む様々な研究が進められている。

#### ※LHCの実験スケジュール



○現在 LHC において探索が進められている新しい物理現象が発見されるか否かにかかわらず、電子・陽電子衝突型加速器の次世代計画として提案されている ILC は、その特徴であるバックグラウンドの少ないクリーンな実験環境において LHC での実験の限界を超える研究能力のある実験施設であり、精密測定や新粒子・新現象の探索により新しい物理の全容解明に貢献し得る点で重要である。

○ILC の目指す研究は超対称性など、TeV のエネルギースケールにあると予想される素粒子の標準理論を超える新物理の探索と解明で、非常に重要である。その内容は以下のとおりである。

- (1) ヒッグス粒子やトップクォークの詳細研究によるヒッグス機構の全容解明で標準理論を超える物理を探索
- (2) 超対称性粒子などの新物理の探索、及び発見された場合その詳細研究<sup>2</sup>

<sup>2</sup> LHC で新たな物理が発見される場合、それが ILC のエネルギー範囲や測定精度でどの程度まで解明し得るか等の点にも留意が必要。

## (3) その他(暗黒物質や余剰次元)

**2. 必要経費(技術設計報告書(TDR)検証作業部会から転載)**

○加速器施設建設費総計：1兆1千億円程度(労務費を含む、その他付随経費や不定性相当経費は除く)

・ <u>本体建設費</u>	9,907 億円 (TDR 記載項目)	
(内訳)		
土木建築	1,600 億円 (工事費)	} 8.309 億円
加速器本体	6,709 億円 (超伝導加速空洞・設備費等)	
労務費	1,598 億円 (=22,892 千人時相当)	
・ <u>測定器関係経費</u>	1,005 億円 (TDR 記載項目)	
(内訳)		
測定器本体	766 億円	
労務費	239 億円 (=3,651 千人時相当)	

○年間運転経費 491 億円 (TDR 記載項目)

(内訳)

光熱水料、保守	390 億円
労務費	101 億円 (=850 人/年相当)

○TDR では国際協力によるコストシェアリングを行うこととされている

**3. 過去の加速器整備での建設費の実例**

## ①国内の実例

・過去に整備された加速器関連の施設において、最も経費を要した施設でも1,500億円程度であった。

※J-PARC 1,524 億円

  この他、大型放射光施設 (SPring-8) 1,100 億円

  KEKB 378 億円 (トンネル工事は除く) 等

## ②海外の実例

## ○大型陽子加速器 (LHC)

・現時点での世界最大の加速器：欧州合同原子核研究機関 (CERN) の LHC (CERN での既存加速器に追加し、大型電子・陽電子衝突型加速器 (LEP) のトンネルを利用する形で設置。LHC のために追加で必要となった費用は、加速器および実験装置の建設費として約 5,000 億円、ただし人件費は除く)。

・LHC は欧州の国際機関である CERN が整備。なお、整備の際に、日本からは 138.5 億円を拠出。日本以外では、米国、ロシア、カナダ、インド等が協力。

- ・ LHC は建設開始時に過去の加速器実験（欧州・LEP 等）における実験データと標準理論（あるいは超対称性理論）に基づき、ヒッグス粒子発見能力について見通しをもって実験が開始された。ただし実験開始前に他の実験で発見される可能性はあった。また LHC のヒッグス粒子探索の結果が（発見のあるなしにかかわらず）標準理論の根幹に大きな影響を与えると考えられていた。

#### ○超伝導超大型衝突型加速器（SSC）

- ・ LHC より少し前に米国で計画された大型加速器施設として、SSC がある。
- ・ 本計画は、米国の国家事業として開始されたが、その後中止に追い込まれた。部会において聴取したところでは、様々な要因がある中で、以下のような点を挙げる意見があった。
  - A) 米国内の予算が緊縮財政に転換されたこと
  - B) 国際プロジェクトでなかったこと
  - C) 設計変更等による経費の増加（45 億ドル→110 億ドル）
  - D) SSC の波及効果が誇張されており、反発を招いたこと
  - E) 建設地の選定が後に様々な問題を生じさせたこと

### 4. 技術設計報告書（TDR）で示された ILC で実施できる研究

○ヒッグス粒子が発見された今、素粒子物理学の次なる目標は「標準理論を超える新たな現象」の発見。ILC では以下の研究が実施できる。

- ・ ヒッグス粒子の崩壊分岐比の詳細測定や3点結合の測定等を通して真空の相転移の起源をはじめとするヒッグス粒子・ヒッグス機構の全容解明やトップクォークも含めた精密測定から標準理論を超える物理を探索
- ・ エネルギーフロンティアの加速器として、「超対称性粒子」等の新粒子探索も重要な課題（ただし、強い相互作用をする超対称性粒子の探索はエネルギー増強後の LHC でも実施予定であり、発見が期待されるのは主に 2015～17 年頃）
- ・ 暗黒物質や、余剰次元等の探索

### 5. 投資に見合うかの判断の留意点

○日本学術会議も指摘している ILC での研究の最適な戦略の見通しについては、ILC で期待される成果を最大化する観点から、2015 年から始まる LHC の衝突エネルギー13TeV の実験（13 TeV LHC）における強い相互作用をする超対称性粒子等の探索結果を踏まえて明確化すべき。

○4. に掲げられた実験内容について、最適な戦略見通しに沿った研究計画を遂行するにあたり、現在、ILC の設計書として示されている技術設計報告書（TDR）で規定されている性能で過不足がないか検証すべき。

○ILCは巨額の経費を要する国際計画であり、国際協力を前提に立案がなされてきたこと、また我が国の財政状況も鑑みると我が国がホスト国として負担をする範囲には限度があることから、ILCにかかる経費について、国際協力による応分の経費分担を前提とすべき。

○ILC計画の投資額の規模に鑑みると、実施の可否を判断する際には、他の学問分野コミュニティの理解・協力を得ることが重要であり、計画推進の判断がなされた場合は、建設期のみならず運用期においても大型科学プロジェクトを含む他の学問分野の研究に影響を及ぼすことがないような特別な予算措置が望まれる。

○ILC計画実施について、時宜を得た判断が行われなかった場合には、国際的な求心力が失われる可能性があるため、不必要な判断の遅延を招かないように、体制の整備や事前の準備が重要。

○計画実施の可否は、上記の留意点を踏まえて判断すべきである。

## 6. 13 TeV LHC の成果を踏まえた ILC 等のシナリオ

13 TeV LHC での成果を踏まえたシナリオに応じて ILC 計画で実施する場合の今後の戦略方針は以下のとおり。

(1) 13 TeV LHC で新粒子（強い相互作用をする超対称性粒子の可能性のある粒子）が発見された場合

方針：ILCにより、ヒッグス粒子やトップクォークの精密測定から、新粒子の背後にある物理現象を解明する。LHCにおいて、強い相互作用をする新粒子が割合軽い<sup>3</sup>場合や250GeV以下の質量をもつ新粒子に崩壊しているらしいとの示唆がある場合には、ILCにおいてこの新粒子を発見し、詳細解明を行うことが期待される。そうでない場合は、エネルギーアップグレードがゆくゆくは必要となる。

効果：超対称性の存在の証明、あるいは複合ヒッグス粒子の確認などにつながり、大きな発見や研究の進展が期待される。ILCで新粒子が発見された場合にも、大きな研究の進展が期待される。

(2) 上記以外の新現象（暗黒物質や余剰次元）と思われる事象の兆候が観測（発見）された場合

方針：LHCで発見された新現象の性質をILCで精査し、ヒッグス粒子やトップクォークの精密測定とあわせて、標準理論を超える物理を研究する。

効果：暗黒物質の初観測や余剰次元の探索の足がかりの観測により、大きな発見と

<sup>3</sup> ILCで発見される可能性がある最も軽い新粒子の質量は、典型的な超対称性理論では強い相互作用をする超対称性粒子の概ね1/7以下とされている。ただし、理論的には不定性が大きいという意見もあることに留意が必要。

研究の進展が期待される。

(3) 13 TeV LHC で新粒子や新現象が観測されない場合

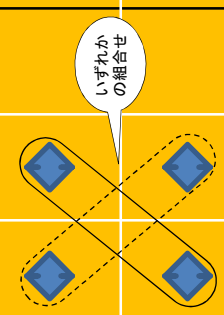
方針：ヒッグス粒子やトップクォークの精密測定から標準理論を超える物理（超対称性理論、複合ヒッグス理論等）を探索する。また ILC は LHC では検出が困難なタイプの新粒子にも感度があるため、これらの新粒子の探索も行う。LHC で未発見の原因を精査し、ILC で発見できる新粒子を探索するとともに、将来のエネルギーアップグレードの必要性を検討する。

効果：標準理論からのズレが観測された場合は、そのズレの大きさとパターンから、標準理論を超える物理の方向性と関連する新物理のエネルギースケールが明らかになる。新粒子が発見された場合にも、大きな研究の進展が期待される。

# LHCの13TeV運転の成果に応じた500GeV ILCのビジョン

「これまでの議論のまとめ」(H27.6.25)より抜粋

13TeV LHCでの実験結果を踏まえた500GeV ILCでの研究の科学的意義及び国際的な求心力の変化	13TeV LHCの実験結果による変化						備考
	ILCの科学的意義			ILCの国際的な求心力			
	上がる	変わらない	下がる	上がる	変わらない	下がる	
1. ヒッグス粒子やトップクォークの精密測定から標準理論を超える物理の探索							
LHCで新粒子の発見があった場合							LHCで発見がある場合、精密測定で如何なる物理かを特定する必要があり、標準理論からのズレが見えないリスクも下がらるため、意義は変わらない、または更に高まるとの両論がある。求心力はLHCと2分。
LHCで新粒子の発見がない場合							LHCで発見がない場合、ILCか他に手段がないとして、科学的意義は更に高まる、または変わらないとの両論がある。LHCへの求心力が低下した場合は、標準理論を超える物理へのアプローチで、ILCでの精密測定に対する求心力が高まる。
2. 超対称性粒子などの標準理論を超える新粒子の直接探索による新物理の研究							
LHCで新粒子の発見があったが、対応する新粒子がILCで直接見える可能性が低い場合							ILCで見える可能性が低い場合は、エネルギーアップグレードがゆくゆくは必要となる。エネルギーアップグレードによって新粒子が直接見える可能性が高い場合は、ILCが一定程度の求心力を有するとの意見もある。
LHCで新粒子の発見があり、対応する新粒子がILCで直接見える可能性が高い場合							新粒子の素性を解明する上で、非常に大きな科学的意義があり、国際的な求心力も高まる。
LHCで新粒子の発見がない場合							ILCで探索可能な新粒子が存在する質量領域が現在より狭まる。しかし、ILCにおける新粒子の探索については手がかりがほとんどないことから、ILCでも新粒子の発見が可能との意見があるほか、ILCがLHCとは異なるタイプの新粒子に敏感であるため、相対的に求心力がある、または高まるとの両論がある。



(1) LHCで発見された新粒子が強い相互作用をする超対称性粒子の場合、ILCで発見される可能性がある最も軽い新粒子の質量は、典型的な超対称性理論では強い相互作用をする超対称性粒子の概ね1/7以下とされている。ただし、理論的には不定性が大きいという意見もあることに留意が必要。

(2) LHCで探索可能な新粒子の質量の上限は、2 TeV (2000 GeV)。500 GeV ILCで直接探索可能な新粒子の質量の上限は250 GeV。(8TeV LHCでの実験の結果、1 TeV以下では強い相互作用をする新粒子の発見なし。)